

# 『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」授業研究会レポート

安芸市立安芸第一小学校 授業研究会

令和元年 10月28日(月)

算数科 第6学年「比例と反比例」 村上 達哉 教諭



新学習指導要領の趣旨の実現に向け、今、資質・能力ベースの授業づくりに、積極的にチャレンジすることが求められています。本授業研究会では、教科指導に期待されていることは何かを、参加者と考えていくとともに、一人一人の教師が自分自身の近未来を描き、自分の目標に向かって学び続ける場となることを目指しています。

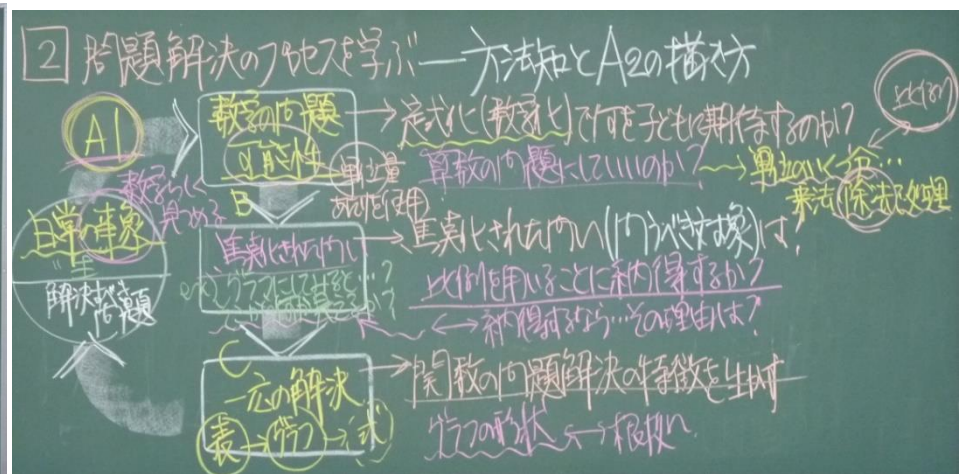
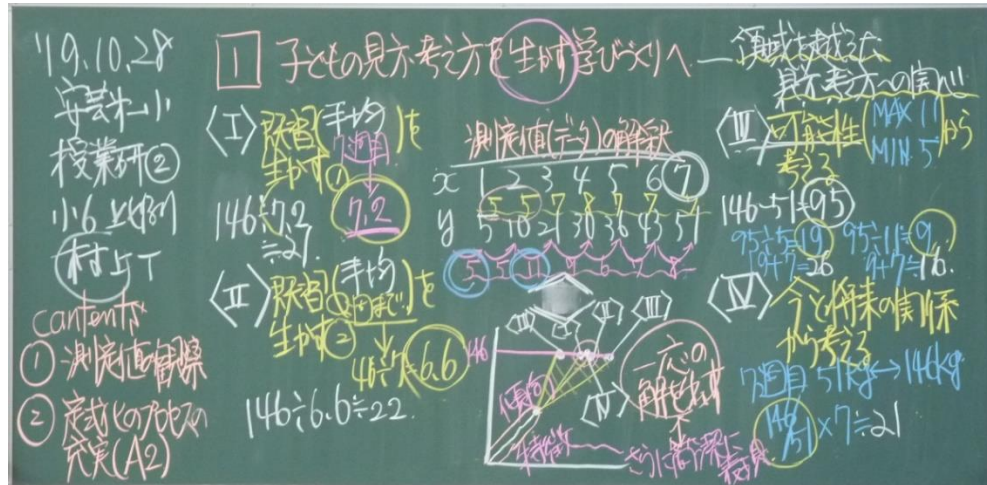
## 目指す子供の姿

- ①日常生活において、伴って変わる二つの数量を見だし、それらの関係に着目し、変化や対応の特徴を表や式、グラフを用いて考察し、比例の関係にあるとみること、問題を解決する見通しをもつことができる。
- ②日常生活で、比例の関係を用いて効率的に問題を解決する場面において、比例の関係についての変化や対応の特徴を問題の解決に生かすことができる。

## 最終板書



## 専門官による指導板書①



## ここがポイント!

本時では、正解を求める授業ではなく納得解を求める授業です。「比例とみることができない」児童が存在してもかまわないということです。納得解を出させる指導は、なぜそうなのかということをもとに説明できることが大切です。

## 協議の視点

表や式、グラフの役割を捉えながら、何を用いて判断していけばよいかを考え、比例の関係をj用いて問題解決しようとしていたか。

## 授業リフレクション

授業リフレクションでは、「子供たちは表の時点で既習の平均での考えで一定の解を見いだせていたのではないか。

表の時点で一定の解を導き出していた児童にとって、グラフを用いることの有用性が見いだせていなかったのではないか。また、平均の意味（一週間ごとの缶の増加の量か、一週間で集まる缶の平均なのか）をもう少し丁寧に問うことで新たな解も見いだせたのではないだろうか。」といったような話し合いがなされました。



## 領域を超えた見方・考え方への関心！！



本単元はC「変化と関係」領域ですが、データを多く扱っています。そのため、D「データの活用」で育ててきた見方を使って、この測定値をどのように捉えたらいいのか、その結果、比例の関係にあるとみていいのかという授業構想にすることが大切です。子供の見方・考え方をその領域だけのものとせず、領域を超えた見方・考え方を働かせることが大切です。

## 問題解決のプロセスを学ぶ

数学的活動に取り組む機会を設ける際には、活動の一連の流れを大切にしながら、どの活動に焦点を当てて指導するのかを明らかにすることがとても大切です。本時は日常事象を扱いましたが、「この事象を算数の問題にしているのか？算数で解決できるのか？」といったようなところからまず考えることが大切です。



## 今後の研究への期待

指導案とは、頭の中で描いたものを全て書くというものではありません。たくさん紙面上に書いてしまうと、指導案に自由度がなくなり授業も縛られてきます。頭の中で描いたもののなかから、主張したいものだけを選択し、必要最小限のものを選んで書くことが大切です。研究が進むとどんどん指導案等も進化しますが、「学校全体のものになっているのか」「自動詞的な学びになっているのか」を一度俯瞰的に見つめ直すことが大切です。研究を推進していくためには全員の「納得と自立」が必要です。

## 提案授業から見えてきたこと

【安芸第一小学校の先生方の声】

☆今まで何度も行ってきた授業研究会ですが、齊藤先生がおっしゃった”知識の拘泥“に陥った感があります。数学的活動を通して子供の「見方・考え方」を育てるという型にはまってしまい、子供の姿がなくなっていました。知識の押し売りにならないように目の前の子供たちの姿、この単元、学年末に成長する姿を思い浮かべ日々実践していきたいと思います。

☆その教科、単元を教えることの意義について、授業づくりをする前に考えていきたいです。系統性はもちろんだが、その見方・考え方を将来どう使っていくのかということ教師が明確にしておくことが重要であるということを感じました。

## 参加者の声

- 子供たちは領域を超えた見方・考え方を働かせて問題解決に向かっていることを考えて、実測データの見方・考え方を考えていかなくはないと思いました。
- 自分の中で大切にしたいことを明確にして、授業を考えていかなければならないことを学びました。子供ファーストで、教師は授業をつなぐ役割をしていきたいと思います。

- 主役である子供達の学びをいかに保障するか。何を子供たちに学んでほしいのかを教師が明確にもつことが大切だと思いました。
- 「比例の関係にあるとみる」という考え方を納得させるのではなく、納得できた児童が比例の関係にあるとみて考えればよいということが分かりました。



check!

子供の思考に寄り添った学びの場をともにつくりませんか？

次回 令和元年 11月 25日 (月) 教材研究会 午後開催 2年「分数」 3年「分数」